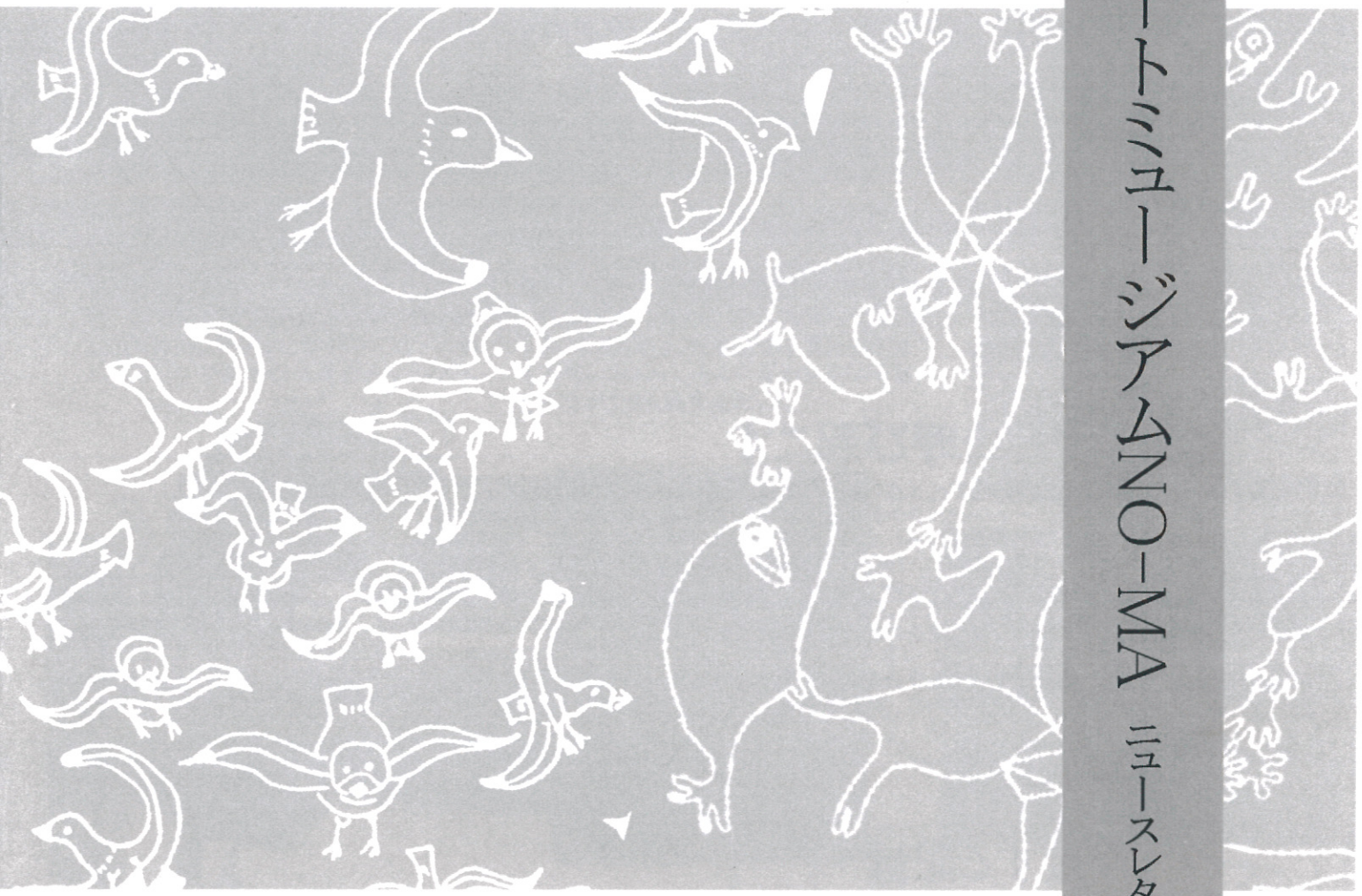
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA ニュースレター7号



2009.3.　発行
発行/ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
お問い合わせ　ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
〒523-0849　滋賀県近江八幡市永原上16　0748－36－5018
URL　http://www.no-ma.jp

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業 夏の特別企画展

岩崎司 ～大志と正義　そして、それゆえの苦悩～

2008年6月13日（金）～8月10日（日）

岩崎司（いわさきつかさ）は、2006年に亡くなられた岩手県の作家である。
この企画展は、2004年6月にボーダレス・アートミュージアムNO－MAが開館してから初めての個展であった。

岩崎司プロフィール　岩崎司は、1928年に岩手県江刺郡岩谷堂川原町に生まれる。「世の中を良くしたい」と熱意に燃えて、1967年（39歳）に江刺市議会議員に立候補し初当選、活躍の場を広げていった。

しかし、1978年（50歳）に脳腫瘍が見つかり入院。手術は成功し退院後は仕事に復帰。1979年議員の任期を満了し、岩崎司は岩手県議会議員に出馬する志を抱く。

そして、大規模な選挙活動。しかしこの時、岩崎司の精神疾患は選挙活動と共に悪化していた。度重なる借金や異常な言動。時には岩手県からタクシーで東京へ向かうなど、著しく奇行が目立つようになった。人の勧めで診察し、1983年（55歳）に入院となる。俳句がとても好きだったようで、外出の際には思いつくままに筆を走らせて俳句を詠み、出会った人に渡していたという。

入院から8年後、俳句や漢詩の表装のように模様を描き始める。それは次第に絵画表現へと発展し、歴史的な豪傑、憧れる文芸作家へのオマージュを描くようになる。湧き出てくるイメージを残そうと、深夜にも病室で描いていたようである。常にベッドの上が彼にとっての創作場所であった。作品はどんどん病室を埋めていき、2006年（78歳）まで、彼の創作活動は続いた。

NO－MA一階では、岩崎の絵を一面に展示しました。絵に額のように付けられた、丸めたスーパーの黄色いチラシ群はダークグレーのNO－MAの壁に異様に引き立ち、その空間に圧倒されていた観覧者も少なくなく、展示されている作品がどうやって作られているのかと聞かれることは毎回のようにありました。

絵画や俳句に登場する人物、記述は苦難に立ち向かっている人たちの物語が多く、たとえば、「サムソン」を描いたものが数枚あります。「サムソン」とは、旧約聖書に出てくる怪力の持ち主で、イスラエルの民がペリシテ人に支配され、苦しめられていた場面に登場する人物です。他にも三浦綾子を描いた絵や、イエス・キリストの象徴である十字架もよく登場します。二階には彼が綴った俳句集も展示し、それらはコピーしたものを読んでいただけるように展示をしました。日本のアウトサイダー・アートを語る上でとても重要な作家である岩崎司の個展をNO－MAで開催できたことで、NO－MAの新しい扉が開かれたことといえるでしょう。

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業 秋の特別企画展

飛行する記憶

記憶は創造を呼び起こす

2008年10月4日（土）～12月7日（日）

記憶は創造を呼び起こす

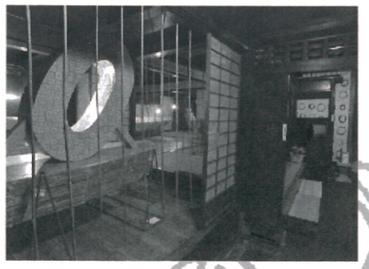
この展覧会は、障害のある作家と美術家として広く世界で活躍する作家をそれぞれ2人1組にし「記憶」というテーマのもとにコラボレーションさせた展覧会でした。観客は、その4組の作家たちの「記憶」作品に出合い、自分自身の中にある記憶イメージにも新たなスイッチを入れるという試みを提案し、ボーダレスアート展の面白さで好評を得ました。第一会場NO-MAでは「カタチの記憶」鈴木治、舛次崇「記憶の光景」植田正治、三橋精樹、「時間の記憶」木下晋、吉澤健、で構成し、モノクロームの静かな力が息をのむように拮抗しました。第二会場では「浮遊する記憶」日比野克彦、佐久田祐一、高橋和彦で構成し、アウトサイダーアートに並々ならぬ好奇心と憧憬を寄せる美術家、日比野克彦さん自身によるインスタレーション展示が行われ、強烈な演劇的空間が生まれました。本展には文筆家、美術家をはじめ様々な分野の鑑賞者が多く来館され、新たな評価軸を得ることができました。

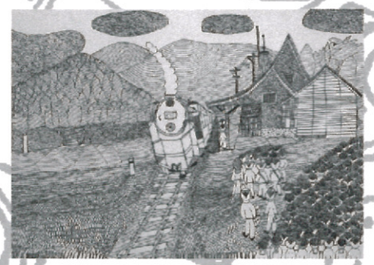
第一会場NO－MA

第二会場旧吉田邸

浮遊する記憶

日比野克彦と佐久田祐一と高橋和彦のコラボレーション





記憶の光景

植田正治と三橋精樹のコラボレーション

カタチの記憶

鈴木治と舛次崇のコラボレーション

時間の記憶

木下晋と吉澤健のコラボレーション

第５回滋賀県施設合同企画展

ing・・・ 障害のある人の進行形

2008年12月14日（日）～2009年1月18日（日）

滋賀県内の造形活動に関わる施設職員が障害のある人の表現や作品の発表の場として、企画・展示を毎年行い、今展で5回目を迎えることができました。障害のある人たちが作品を生み出す、まさにその瞬間を見つめてきた職員だからこそ持てる感性や価値観を大切にし、日々の生活の中で、作者が何を感じ制作したのか、その作品を通じて何を発信したいと考えたのか。作品の制作されたその背景までにも目を凝らし、耳を傾け、障害のある人の表現の“ ing… ”現在進行形の姿を社会に発信してきました。必ずしも発表することを意識しているとは限らない作品たちだからこそ、その作品が生きる展示を検討することが重要になります。

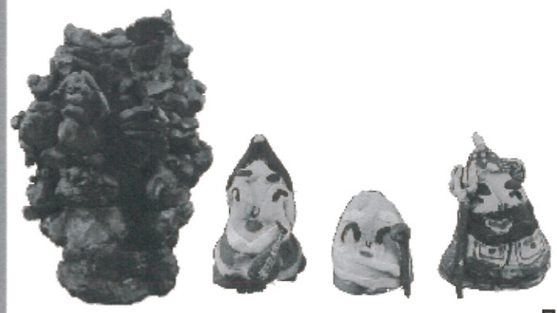
今回初めて会場をボーダレス・アートミュージアムNO-MAの他、近隣の初雪食堂、尾賀商店とし、一人一人の作品が生かされる場を求め、計3カ所で展示を試みた今展は、あわただしい年末年始にも関わらず、合わせて1341名の多くの観覧者の方々に、八幡界隈を散策しながらご観覧いただくことができました。

自宅でゆっくりとお酒を飲みながら、ペンを走らせ、ひらめいた図形を組み合わせ色鮮やかに描かれた鳥たち。数あるレパートリーの中から、今回、裸婦に焦点をしぼり、ユーモラスに表現された絵画と陶オブジェ。数センチ間隔で糸を替えて、刻み込まれた刺繍。様々なメッセージを託し貼り付けられたメモ、メモ、メモ。そのメモ作品を手本に来館者が毎日参加できるワークショップコーナーを設けました。総勢40名の作品約300点が展示され、展覧会オープニングイベントでは出展者によるギャラリートークとギターや縦笛のコンサートで出展者、一般のお客様、アーティストが集って大変濃密な1日を過ごしました。

ボーダレス・アートミュージアムNO−MA

尾賀商店

初雪食堂



勉強会

ing…は滋賀県の施設で働く職員が実行委員会を組織し展覧会を開催しています。年に数回、展覧会を開催していくために専門家の肩をお招きして勉強会を開いています。
次号、勉強会の詳細を掲載予定。

第5回滋賀県施設合同企画展ing…
障害のある人の進行形　勉強会
2008年4月28日（月）
場所:旧吉田邸（NO－MA特設第2会場）
アドバイザー・講師　井上正隆（元もみじ寮寮長）

第5回滋賀県施設合同企画展ing…
障害のある人の進行形　勉強会
2009年3月6日（金）場所：尾賀商店
アドバイザー・講師　和田 雅弘氏（伏見工芸）

助成 日本財団 The Nippon Foundation

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会

アートはボーダレス

滋賀県立近代美術館　ギャラリー
2008年11月11日（火）～24日（月・祝）

独走羅列ーどくそうられつー

この展覧会は、新しい表現の可能性を秘めた‘未知の制作者’を発掘するため、2008年6月2日から8月25日にかけて公募した「第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会アートはボーダレス　The Borderless Art-Collection」に応募してくださった、551名の作家の中から13名を選出し、開催しました。

海の中で漂うような、上下左右のない絵（足立伸一）、伸縮自在な女性の裸体（伊藤賢士）、自分の名前が羅列された紙（伊藤峰尾）、植物や花、動物が一体化された女の胸部（内山智昭）、色鉛筆の力強い四角い絵（岡林美喜子）、口をあけ、ぽかーんとしているアフリカ造形のような陶器（鎌江一美）、焦点のない模様に奇抜に白を使った絵（北島雅臣）、文字が文字としての役目ではなく、別のものになっていく絵（橋高博枝）、細い線の繋がりが、飄々と遊んでいる絵（木本博俊）、女の業が人類に問いかける世界（鄭（すずき）万里絵）、身体のリズムがそのまま描かれている絵（楠葉亜樹）、同じ顔を何体も何体も作る（山際正己）、お母さんをぐるぐると、まるで流星のように描いていく（山西敏子）、これら13名の作品を展示した今展は、たった2週間で観覧者数が2000人を超え、オープニングには13名中10名の作家が遠方から来てくださり、中には自分の作品の前で動こうとしない方もいらっしゃいました。病院の壁にセロテープで貼られていた自分の作品が額に入り、たくさんの人に観てもらえることの感想を「恥ずかしい」と言った方もいて、観覧者の声を作家に届けたいと何度も思いました。

会期中には作家の田口ランディさんのトークも開催し、アールブリュットのある作家の統合失調症についての話や、今展の作家についての感想、またそこから感じられる人間の表現衝動についての話をされた。トーク終了後も質問が幾つかあり、盛り上がりを見せた展覧会となりました。

2ヶ月強の公募期間を大幅に超えて、551名もの方々が作品を応募してくださった背景を考えると、「表現」とは「鑑賞者」がいてこそ存在するものなのだということを思わされました。展覧会会場には13名の方の作品を展示し、残り538名の作品はモニターにて、たった5秒ずつではありましたスライドで鑑賞できるようにし、3件の音楽作品も再生機で聴いていただきました。

第8回 全国障害者芸術・文化祭滋賀大会

第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会は、「アートはボーダレス」と題し、「障害」の枠にとらわれず、人間本来の持つ共通普遍的な表現の力と表現活動の芸術性・文化性を滋賀から全国に情報発信し、人として互いに認め、高めあえるボーダレスな芸術・文化活動の環境を積極的に創造することを目的として、滋賀県内各地で一年間を通して、これまで滋賀で培われてきたボーダレスな芸術・文化の取り組みをベースにした様々なイベントや表現活動ワークショップなどを展開してきました。

オープニングは和と洋の打楽器による演奏を障害のある人たちの造形作品と活動風景の映像とのコラボレーションで幕を開け、秋には全国から公募して集まった551名の作家、5000点を超える作品の名から「独走羅列」というテーマに適した13名の作家200点を超える作品展を滋賀県立近代美術館で開催いたしました。これら公募作品は今大会の記念図録集「アートはボーダレス」に収録しています。

2月21日からは大津と彦根の2会場で、「バリアフリー映画祭」を開催し、さまざまな障害のある方や高齢者、また障害のない方も心から映画を楽しんでいただくために、障害のある人たちのためだけでなく、みんなで楽しむための工夫を施した副音声や字幕付きの映画作品を上映しました。

そして、3月15日には今大会のファイナルを迎え、次年度開催の静岡県へとバトンタッチいたしました。

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA 地域交流事業

平成19年度から始まったこの事業は、NO-MAが人々の日常生活と美術鑑賞を再度交差させる、まさに地域と美術の交差点をコンセプトとしたものである。

カッパはどこにいる ―八幡堀カッパ探し―

第一回カッパをさがせ 日時2008年7月20日(日) 場所 酒遊館・八幡掘界隈
第二回カッパをつくろう 日時8月23日(土)・24日(日) 場所 尾賀商店
第三回カッパはいたか 日時8月31日(日) 場所 近江兄弟社小学校教育会館

観光地区でありながら人々が生活する生活地区でもあるこの地域にある美術館であることはNO-MAにとって重要なキーワードになります。NO-MAの前の道は朝鮮人街道と呼ばれ、江戸時代の文化交流の道でした。その道を今、子どもたちが通学路として日々通っています。学校の帰り道にランドセルを背負って立ち寄ることができる美術館でありたいと立ち上げたのが地域交流事業です。

美術やNO-MAそのものに対する距離感を少しでも軽減しようと始めた地域交流事業は、地域を舞台とし、ワークショップ形式で実施するべきだと考え近江八幡のシンボルともいえる八幡堀を舞台に連続ワークショップを開催しました。

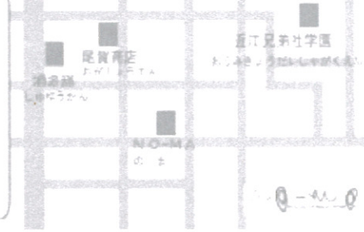
3回のプログラムの会場をそれぞれ別に設け、様々なゲストが子どもたちに近江八幡の歴史や八幡堀にちなんだワークショップを実施し、子どもたちは夏休みの間、元気いっぱいに参加していました。

第1回目の7月20日に実施した「カッパをさがせ」では、八幡東中学校の美術部の生徒や地域の子ども、その保護者など総勢20名の参加となり、酒游館の西村さんに八幡堀の歴史について話を聞いて、八幡堀でカッパを探しました。

第2回目の「カッパをつくろう」は、8月23日・24日の連続で開催し、尾賀商店の篆刻家であり書家でもある斉藤さんに八幡堀を墨絵で表してもらい、そこに自分の思い描くカッパを字や絵で表現しました。

第3回は「カッパはいたか」ということで、劇団トルを主催しているきむさんにこのプログラムの総括としてお芝居をしていただきました。お芝居だけ観たいという人にも参加してもらい、近江兄弟者学園の教育会館を使って実施しました。

この事業は参加者も会場も、関係者も含まれた地域に暮らす人たちによって開催されたワークショップとなり、NO－MAにとって大変印象的なものとなりました。



にわのま NI-WA=NO-MA

2008年9月28日(日)/10月11日(土)/11月24日(月・祝)

今回はそのボーダレス・アートミュージアムNO-MAの「ニワ」を舞台に、子どもになじみやすい様々な素材をアートという切り口からとらえ、アートの間口を広げるための一つの可能性として、土や園芸という素材をアートという切り口で子どもに提供することで、NO-MAに足を運びやすい環境を作り、昨年度から実施している地域交流事業の参加者である小学生が、NO-MAに来やすい場所として定着させるために、今回のワークショップで作成されたものをNO-MAの蔵を使って展示し、自分の作品が美術館で展示されるということを楽しんでもらうことができました。

近江八幡にある町屋の特徴としてあげられるのが、前庭、中庭、裏庭と庭が各所に配置されていることだといわれている。京都の町屋は、前庭は存在せず、近江八幡ならではの、庭を家屋の中に取り入れた生活環境がこの近江八幡にある伝統的建造物群保存地区に残っている。

日本家屋における「庭」は本来「ニワ」と呼ばれていた。農家だと土間や縁側の軒下がそれにあたる、つまり「ニワ」は屋外と屋内の中間領域。この中間領域があるために人々の生活は環境に順応した、さまざまな環境で暮らすことが出来た。つまり私たちが本来的に有しているボーダレス空間が「ニワ」と言える。現代の住宅をみるとこの「ニワ」が無くなってきている。そのために環境に対して極めて鈍感になってしまった。

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAにも様式どおりに、前庭と裏庭が存在している。裏庭には、住人が植えたであろうタチアオイやアジサイが残り、水仙も早春には花を咲かせる。展示に使うこともあり、展示空間である屋内からも見渡すことのできるこの裏庭は、借景としても展示スペースとしても活用してきた。しかしながら庭としての本来的な活用はこれまでできてこなかった。観覧者のアンケートからは、庭が見えるのがいい、という意見がちらほらあったすることからも、NO-MAにとっての裏庭は、展示空間の奥行きを感じさせるための空間であったり、生活空間だったことの証であったりと庭としての機能が重要であることが窺える。

今回の地域交流事業の活動を実践報告論文「まちの木霊が結ぶ地域社会とアーツ」にまとめ、財団法人住宅総合研究 住教育フォーラム第10回「住まい・まち学習」に応募し、東京で発表しました。

貸しギャラリー

我流◀pangaea展▶

2008年9月12日(金)～26日(金)

東京都中野区にある社会福祉法人愛成会を拠点に活動を行っている「アトリエPangaea(ぱんげあ)」の個展。

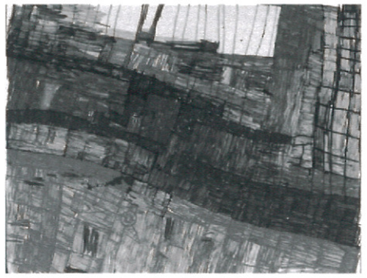
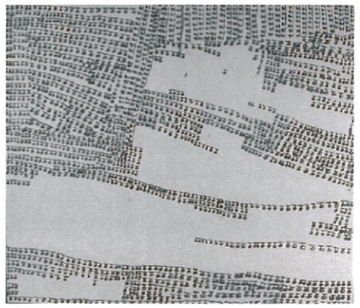
「Pangaea」というのは、地球上に3億年前にあったと言われている大陸の名前からとったもので、「みんなひとつ」という願いを込めて名付けられたアトリエです。

今回は、関西初となるアトリエPangaeaの展覧会をNO-MAで開催した。日常生活から生まれる自分流のスタイルを貫くアトリエ参加者の作品50点ほどを一堂に会し、NO-MAの1階、2階を自由に使った展覧会となりました。

アトリエ参加者15名ほどの作品を映像、音楽を織り込み展示。水性マーカーで描かれた作品が動画として展示されていたり、落書き帳に描かれた作品が大きなパネルとなってNO-MAの壁面に大きく描かれていました。作品一つ一つが生き生きとしていて観ている方も一緒になって楽しい気分になってしまうような空間となりました。

作品を加工する、という行為については、まだ疑問を抱くこともあるかもしれない中で、作者との共同制作という位置づけで新たに制作された作品が、NO-MAの空間で生き生きと展示されていました。

スタッフも参加者も「作品を制作する場」を共有し、「作品に対する思い」を共有しているからこそ、作品として生きてきたのだということがよくわかる展示に表現するということは、自由。自由だからこそ自分流、我流な方法で表現してもいい、そんな自分スタイルを楽しむことができた展覧会だった。

大山マコト展

2008年8月19日(火)～24日(日)

近江八幡市内に在住の大山氏による個展「あの風にのって」は、NO-MAの1階部分に、大きな幻想的な作品を20点近く展示し、プロの打楽器奏者宮本妥子氏のマリンバの曲が流れ、作品と音楽が空間に柔らかくマッチする個展でありました。

最終日には宮本氏の演奏会も開催され、盛り上がりをみせていました。

篠村利治の世界

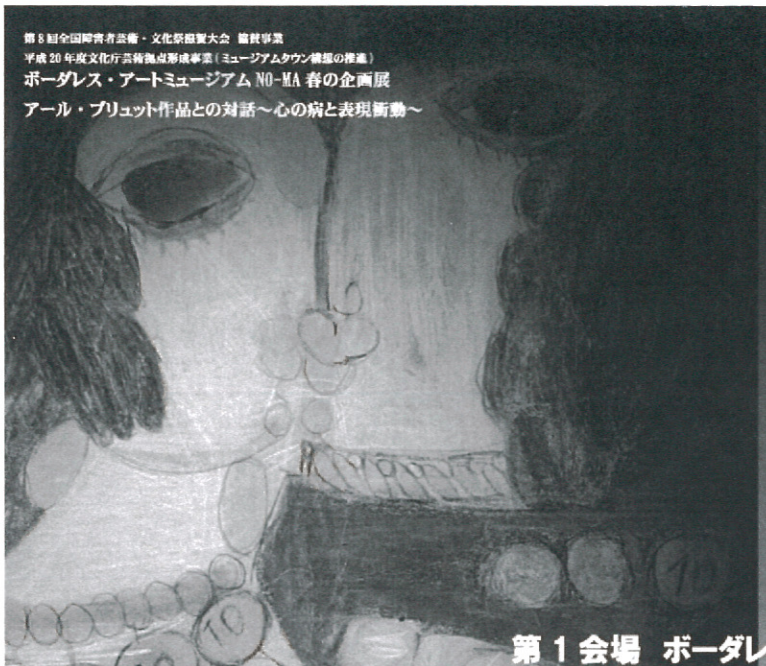
2008年9月2日(火)～7日(日)

宮崎県日南市の社会福祉法人つよし会つよし寮で入所している篠村利治さんの個展。

日々の活動で作り上げられている車の焼き物を県外の人たちにも知ってもらいたいという思いで開催されることとなりました。つよし寮の施設長齋藤洋明氏が滋賀県の入所施設で勤務活動をしていたときに陶芸活動に携わり、宮崎に戻ってからも施設で精力的に陶芸活動を行い、作り上げられた作品を大切に保管しています。

愛くるしい車の形に笑顔になりながら観覧されている姿が印象的でした。

第8回全国障害者芸術・文化祭祝賀大会 協賛事業
平成20年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）
ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 春の企画展
アール・ブリュット作品との対話～心の病と表現衝動～



「私の愛は蝶のように飛び去った・・・」これは、アロイーズ自身が絵の中に書いた文章であり、姿を変貌させて美しい羽を広げる蝶を「再生の象徴」としたものです。

アロイーズ（1886－1918）は31歳で統合失調症を病み、46年間に及ぶ精神病院での入院生活で膨大な作品を残しました。高い教養を持っていたアロイーズは、オペラの場面や錬金術などの知識を自分なりに融合させ、独自の世界を描き創造しました。「アール・ブリュット」の概念を発案した画家ジャン・デュビュッフェは早くから彼女の芸術に情熱的な関心を寄せ、主要な作家としてアール・ブリュットコレクションに作品を加えました。以来、アロイーズの芸術は人々を魅了し国際的なスケールへと広がっています。

今展は、スイス・アロイーズ財団の協力により、初期から晩年に至るアロイーズ作品を一望にすることが出来る大変貴重な展覧会となっています。

色鮮やかな作品群は、まさに蝶のように華やかに舞い、アロイーズの再生を物語ります。

この展覧会は表現のあり方についての問いを私たちに投げかけてくれます。

第１会場　ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

アロイーズ

私の愛は、蝶のように飛び去った・・・

平成21年5月10日(日)まで延長決定

第２会場　旧吉田邸

目覚めぬ夢

～日韓のアール・ブリュットたち～

第2会場「旧吉田邸」においては「目覚めぬ夢」展が「アロイーズ」の個展と同時開催されています。

「アール・ブリュット」という概念は、障害者の芸術を指す言葉ではありません。しかし後に「アール・ブリュット」を命名し、その作品の発掘収集に情熱を傾け続けた美術家ジャン・デュビュッフェの活動期の前後1920～50年当時、主に精神に障害をおった人々の表現の発見がメインであったことは事実です。

デュビュッフェ自身は「狂気は建設的なものであり、豊穣かつ有用で貴重な能力である。」と述べています。

彼らの作品に対して新しい価値評価をもたらしたこの概念は、「表現」というものが人間の心の深層に眠っているイメージの豊かさや不可思議さに光をあてることになったのでした。それは人間個々人が、病んでもなお保ち続ける「生きぬく力」「自らを再生する力」というものに深く関わっていることを明らかにしたとも言えるでしょう。

当然のことながら、日本にもそのような作品は存在します。此の度、私たちの数年間の国内及びアジア調査の着手の中で、新たに発見してきた作品の中から選定した5人の作品を展示しご覧いただきます。

目覚めぬままに疾走する非現実世界のランナーたちの夢に出会ってください。

関連イベント　トークショー

「心の病と表現衝動」

日　時　平成21年4月26日(日) 14時～16時
参加費　無料
定　員　30名（先着順　要予約）
場　所　野間清六邸
講　師　末安民生（慶応義塾大学准教授）
　　はたよしこ（本展アート・ディレクター）

日本財団 The Nippon Foundation　swiss arts council prohelvetia